

令和7年度 学校自己評価書(様式)

鈴鹿市立明生小学校				
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
学力向上×ICT活用	【授業改革】 ①研究授業を年間一人1回行い、指導主事を年間3回招聘し指導を受ける。 ②校内研修で対話的な学びを実現するための方策を探る。 ③学び合いとICT機器機器の活用をつなげるために、・情報の共有・情報の操作などの要素を学習活動に取り入れる。 ○「授業でPC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用したか」での週3回以上75%以上 【家庭学習の充実】 ④「家庭学習のてびき」を活用し家庭と連携していく。 ⑤4年生以上は日常的に端末を持ち帰り、学習内容の予習復習に取り組ませる。 ○毎日宿題をする80%以上 【読書活動の充実】 ⑥月に低学年6冊、中学年4冊、高学年2冊以上の本を図書室で借りることを目標とし、学期に1回多読賞を表彰することで意欲付けを図る。 ○本読むのが好き80%以上 【学習ボランティアの活用】 ⑦学習支援や実技補助などでボランティアの支援を受ける。 ⑧日本語指導や個別対応での支援を受けることで学力保障につなげる。	【授業改革】 ○単元によってICT機器を効果的に使える場面を考えながら使用することができた。 ○子ども同士が考えを一度に把握できるというICT機器のよさをいかした使い方を意識することができた。 ○ICT機器の有無に関わらず、友達と交流しながら自分で考え課題解決をしているという項目で91%（市アンケートより）を示している。 【家庭学習】 ○毎日宿題をする 92.6%（学調アンケートより） ●自主学習ノートの提出に関して、週に1回は提出するなど各学年のきまりにより安定して取り組むことができたが、取り組み内容や丁寧さなどに課題が残る。 ●4年生以上はほぼ毎日端末の持ち帰りをすることができたが、課題内容の充実が今後の課題となる。 【読書活動】 ●本を読むのが好き 78%（学調アンケート） ○本の貸し出し合計冊数（4月～12月）今年度は11,757冊（昨年度は8,830冊）と増加傾向にある。 【学習ボランティアの活用】 ○低学年向けに、読み聞かせをさせていただいているお陰で、読書への意欲につながっている。 ○日本語指導や実技補助などさまざまな場面でボランティアさんに入っていたいっているおかげで、円滑に授業をすすめることができ、子どもたちの学力保障にもつながっている。	・今後も職員全体で研鑽し、よりよい子どもの姿を目指して、全教職員が1回以上研究授業を行うなど、授業実践を行っていく。 ・端末活用に関して、明確な目的をもって活用する。特に、友達との意見交換の手段としての活用方法について更なる研修をしていく必要がある。 ・自主学習の取り組みについて、上手にまとめられているノートを紹介するなど、取り組みの質を高められるようにしていく。 ・端末の持ち帰りに関して、日々の授業につながるような課題を出し、授業時間の確保を行っていく。 ・読書好きを増やすために、「本の福袋」「先生のおすすめ本」「図書委員のおすすめ本」「図書館ビンゴ」等の取り組みをしていく。	・下級生の指導が行き届くようになったと感じている。ダメなことはダメとはっきり指導し、担任によるばらつきがないよう、取り組んでいただきたい。 ・学習支援が多忙の時思うようにできないときがある。ボランティアの募集をよく発信していただき、良い方向にあると感じている。 ・ICT機器は、現状の子どもの環境には必要と思う。子どもたちが何を学んだかを課題、研究テーマとして取り上げると面白いと感じている。 ・本校で取り組まれた子どもたちによる本の帯の創作は、子どもたち目線で本の内容を把握理解して帯に自分の言葉で本を紹介するという興味深い取組だ。ぜひ高学年全体への拡大展開をしてほしい。 ・すべて指標に沿っていると感じた。
	【安全安心な学校づくり】 ①「いじめ0」に向け早期発見・早期対応に取り組む。 ②子どもの些細な変化も見逃さないよう「相連報」による情報共有を行う。 【登校支援】 ③スクールカウンセラー、スクールライフサポーターと連携し登校支援を行う。 ④保健室・ほっとルームを活用し教室に入りづらい子どもが安心して過ごせる場とする。 ⑤校務支援システムを活用し連続で欠席している児童の早期発見に努める。 ○30日以上欠席児童10名以下	○毎学期いじめアンケートを実施し、いじめの早期発見・早期対応を図った。 ○ピンクシャツ運動に取り組んだ。 ○打合せや職員会議で、気になる児童の様子を全職員で情報共有した。 ○日常の問題行動については、担任や学年が中心となり指導を行った。また、指導については管理職や生徒指導担当と協議の上、学校としての対応を進めた。	・いじめに関わらず、日常に起こるさまざまな問題行動について、日頃から児童の様子を注意深く見守り、職員間で情報共有を行いながら早期発見・早期指導を徹底していく。 ・保護者との連絡を密にとり、不登校傾向のある児童について教員が一緒に考えていけるような関係を築いていく。必要だと思われる保護者に、外部機関の紹介を行う。	・小さいいじめでも学校運営協議会で情報の共有を図ってほしい。子どもたちに何が起きているか知ること、子どもたちとの接し方を考えられると感じている。 ・安全安心な学校づくりがされていると感じた。 ・安全安心な学校づくりの一環として、子どもたちの些細な変化に着目し、「相連報」による情報共有の体制をとられていることは評価できる。変化に気づき、よりスピーディに対応するには、具体的な判断基準を設けて運用されること見逃しが最小限に抑えられたいと思う。 ・子どもたちの個性に応じた教育ができる環境になってきたと感謝している。勉強をしなればいけない子と支援が必要な子を分けて考えてはいけない。
	【キャリア教育】 ①「未来応援人」や「地域人材」を活用した授業の実施 ○各学年、年3回以上 ②中学校職場体験の受け入れと授業の実施 【自己肯定感の向上】 ①子どもたちの自己肯定感を高められるような取組を研修・人権・生徒指導で企画し実施する。 ②肯定的回答の平均より否定的回答の割合に着目し、改善に努める。	○「ぐっじょぶさん」「自分のクラスのプラス1」などの取り組みを設定し、他者との交流や認められることで、自己肯定感の高まりに効果があった。 ○非認知能力の一つ、やりぬく力の向上をめざし、それぞれが立てた目標の達成に向けてとりくむことができた。 ○社会性を高めるために、異学年で教え合ったり声をかけ合ったりすることを目的として、大縄跳びの取組を行った。友達と協力し、大縄跳びをする楽しさを共有することで、コミュニケーション能力や思いやりの心を育むことにつながった。	・普段から児童の良い行動を認め、褒めることで児童の行動を強化していく必要がある。そのために、児童をよく観察し、コミュニケーションを密にとっていく。	・昔遊び等で、子どもが「見て、見て。」と自己アピールをする。このようなチャンスが多いといいなと感じている。地域の人と子どもたちとのふれあいの機会が多いほうがいいと思う。 ・様々な出前授業など、子どもたちも楽しく学ぶことができていてよかった。 ・非認知能力については、ワークショップのテーマに取り上げ、先生方と議論したが、人とかかわりや失敗体験を通じて向上されることに着目して、今後とも継続して能力育成を図ってほしい。
	【情報発信】 ①学校だより、学年だより、学校ホームページなど様々な方法で学校生活の様子を伝える。 ②児童・保護者へのアンケートを実施・分析し教育活動に活かす。 ○アンケート年2回 【学校運営協議会】 ③学校運営協議会と小委員会を開催し、学校経営や教育活動の協働を図る。 ○学校運営協議会年6回・地域協働活動委員会年10回 【あいさつ運動】 ①地域や家庭と連携してあいさつができる子どもを育成するために日常的に教職員からあいさつをしていく。 ○あいさつができる子ども90%以上	○生活目標にあいさつすることを設定し、点検活動に取り組んだ。（あいさつができる児童94%） ●あいさつするが相手に聞こえなかったり、あいさつしなかったりする児童が一定数いる。	・あいさつについては、普段から教師自身が率先して行い、児童の手本となる姿を見せる。今後も児童への啓発のため、学期に1回程度点検期間を設け、あいさつへの意識づけや、あいさつしあうことの気持ちよさを児童が感じられるようにする。	・年間を通しての学校の様子につき学校だよりを継続してタイムリーに発行され、地域への情報提供も回覧板を活用し情報発信されている。 ・学校だよりがかなり発行されており、大変評価できる。さらに子どもの様子が分かりやすくなると、住民の目に届くかもしれない。 ・地域協働活動も、学校に関わる人の教育も勇気をもって学校と委員が進める環境づくりがしたいと感じている。 ・学校運営協議会は定例開催されており、連動して地域協働活動委員会の開催を適時行い、課題、懸案事項のフォローアップ体制が実施されている。定着傾向であり、地域住民との連携強化が図られている。 ・見慣れない人にあいさつすることは難しい。子どもも相手を見ているのではないかな。「できたから、なくせばいい。」ではなく、続けていくことが大切である。 ・見守り隊が少なくなっていないだろうか。
	①平田野中学校区の「人権教育カリキュラム」に基づき、各学年で人権学習に取り組む。 ②人権教育に関する内容を取り入れた授業参観を行う。また、学習したことを通信等で発信し、保護者・地域への啓発を行う。 ③「仲間づくり研修会」をもち、学級の人権課題や児童につけたい力やその育成のための取組等について検討する。 ○仲間づくり研修会や人権に関する研修会年4回 ④人権教育に関わる研修会や研究授業を行い、教師の人権感覚や指導力を高めるとともに児童理解を深める。 ⑤子ども一人ひとりの特性やニーズを把握するとともに、保護者との連携を図る。支援の必要な児童に応じた個別的教育支援を推進する。 ○支援が必要な児童の個別的教育支援計画作成率100%をめざすとともに、内容の充実を図る。	○全学年でカリキュラムに基づいた人権教育を行った。また、特別支援学級の児童への理解を深めるための授業や、多文化共生の取組を全学年で実施したり、児童会を中心に全校縦割り班活動を行ったりした。これらの実践により、児童同士をつなぐきっかけとなり、多様な考え方や個性を受け入れる姿勢を育むことができた。 ○全学年で人権目標を意識した内容で授業参観を実施した。また、人権学習への取組について通信で発信した。これらの取組を通して、保護者への啓発につながった。 ○仲間づくり研修会は、1回目は各学年部で、2回目は全職員で行った。児童の実態から見つかった人権課題を解決するための取組や成果・課題を交流する中で、児童についての共通理解を図り、仲間づくりの方策を学び合った。 ○夏季研修会や人権感覚ブラッシュアップ研修会では、教職員の人権意識を高めることができた。 ●支援の人員や時間が足りないので、全てのニーズに応えていない。	・引き続き、取組を通信や校内掲示板(人権ポスター・多文化共生教育の取組など)で全校児童や保護者、地域の方に発信してい。また、参観などの機会に、人権教育に関する内容を取り入れた授業を保護者にも公開していく。 ・児童が互いの違いを認め合い、自分らしく過ごせる学校づくりにつなげるためにも、日常的な関わりの中で一人ひとりの声を丁寧に受け止め、必要な支援が届く体制を継続的に見直していく。	・どのような境遇の子どもたちも、楽しく学校に通うことができるように考慮されていてよかった。 ・子どもたちのかかわりを最優先に考え、外国籍の子どもたちへの人権教育に取り組まれている。教育により価値観が共有され、相手を尊重したり、敬う心が育まれることを願うばかりだ。 ・特別支援学級や日本語教室の児童が協力学級で「いってらっしゃい」「おかえり」の言葉がけをされていることは、素晴らしい取り組みと思う。 ・地域でも、最近は、問題が起きているとは聞かない。うまくいっていると思う。 ・中学年くらいが大切だと思う。明生小は、よくやっている。

- ※ 指導主事

教育委員会に在籍する職員で教職員の授業指導等を行う者
- ※ 端末

一人一台貸与されているクロムブック
- ※ スクールカウンセラー

月1回程度学校を訪問し教育相談を実施
- ※ スクールライフサポーター

子どもの学校生活の支援のための非常勤職員。登校しにくい子どもの家を訪問し登校たり、登校後も寄り添ったりして支援する。
- ※ ほっとルーム

不登校支援として令和5年7月開設。令和6年度は週4日9時間
- ※ 校務支援システム

一人一台端末にあるアプリケーションソフト。児童の出欠・成績処理・教職員の出勤退・教育委員会からの連絡等に利用
- ※ 未来応援人

旧「すずか夢工房」様々な経歴の方の人材バンク
- ※ 個別の指導計画

個別支援が必要な子どもの支援計画と支援記録